



刻南留別志序

人之讀書息苟過也讀而弗記記而弗思
 思而弗得五車雖多亦奚以為天神氏地
 神氏悠遠不可知焉自人皇以來亦數千
 年世變風移人去物亡古之所有今不必
 有今之所無古不必無雖載籍所記過差
 紛紜疑滯不通者不可得而考矣歟之不
 能誰肯然矣但徠先生著南留別志南留
 別志者邦語懸衡辭也書中句末多此語
 因命焉斯書懸衡疑事無近遠無細大不
 為次序隨其意所發而錄之實漫筆也說
 有據者亦有無據者其有據者博覽不苟
 彼此相照比類取微也無據者淹貫古今
 通達事情思而得之厭服人意也也所迷



古名はさそりかひつりしき信名はららし大天とせら
きんしふまつりつらつ君やいふなるをたひならん
きんかろくしやうなるふとよんころなるし太子と
足しすあはさなしつれこと皇子皇子と名別し
是もさそりしころなるしし神切意神よりあは
と海赤のほまあそ海神も海字もさそりし
つ海

一 登海のふ山述がきそわ別のあるなり神武帝
州赤しなまひしころ大洲の地名なるを大和といふ
し大洲の地名あるを帝都なる山述の文字用お
ころなるしの地名なるを海とよむと云々
④文字とつさころ海と和のさかころいふ名とせ
きりたり桓武帝より後帝都より何れぬり
大和の名とぬらぬ誤りしころなるしと海島

なりやらのふも誤なりたのころ島とらふに男子島と
いふなりろの神ろき神ろんふものころのころん
るの類して助法なり志と志はとらふも欽明帝
の都の名と大洲はうらうらとめらるなり
一 ころ藤といふ新設つものころの藤のやうと
併さしころいふし新設ころなるし海と名理も
しころ子細もなれるなり
一 大将と固取とあるに古八軍固とあるの
何れしと誤りるなり
一 武内宿禰と三石歳と教代同名なるし
と威取とさわなり
一 并度と滑稽の男なりむしつとつさる
ころ并の字とくかななりとらるなり
一 けらいの家録なるし

一 うらうらうの意を射せる名なる一 意のよ
内山をむらむら記にうらうら

一 武務國にのり牧の長を別當と云る今まある
格父左司別當を井本友別當といひ職なり

一 けし山といふ常盤山といふなるもむらむら
帝詔の縁なりひららと帝隆のくもひらら

一 今てきなりき訛してちなり東人の後なり
名よ文字に訓よのなるり大和近江常陸なり

一 舟の國帳といふ舟
省の國帳といふ舟

一 邊所といふ美の切なるり実の切を抄るら
船といふらととらと久らり抄るら

一 上總がんとつふと下總がんとつふと也安房とつふと
とつふととつふと女の子桑園なる一 下野園とつふと

一 上總國の内本納といふ所を世例は法園といふ所
本納の橋の祠ありと橋姫と祭なりなり桑の形

一 形より中よりと本納を橋姫といふと
と故をの云傳るなり本納の帆糸なる一 法園ハ

一 帆屋なる
江戸水戸坂戸とつふと法園とつふと地宗

一 大峰の後鬼宗鬼ハ紀氏の人名なり一 紀本といふ
も紀氏なる一 紀本といふ

一 田中大石田は三枝山邊巨勢郡部河津野など

又いんさかし聖人のた紙をらぬ人かくもあまき
きりとする物かな

一 花の蟹なり秋の飽なり夜は河つきなり冬は
いづら之帯の軽なり時ハまをなり酸ハ法なり
花ハ酒なり

一 にかみこらふふ句の字とてさるる音通すれ誤りて
若こ句こかき遠らむ女の有と昔の情さごもが
珍しきさるる思ひて誤らるるさるる弱
若こ通すれも異國のさるる若の字ハまれを
空ハ肉の古字なれ共は誤りなはぬさるるんは
方そハ常事こをさるる類と思ひ合をぬ
一 神はとらふ巫祝の神とつらふ道なり中相説
法とすし一は佛法と加へらるなり陰陽又
約とすしハ性理とすし一はなり神はすから

またなりこらふたとてさるるぬあいつらと神たこまたさる
なりりなれこもまたと神たよとてさるる三代
の古たとてさるる人の心さるるいえさるるゆとさなり
一 搬夷ハ國の名なり何らす人の種類なり 國西ハ
皆さるなり倭人さるる種類なり
一 阿蘇ハ地誌なり一 肥後國 球磨郡ハ地誌
地なり一 陸奥ハ地誌なり一 後ハ又陸の字
ハつきとむつ國もさるる文字ハつきとめめ地も
常のさるなり

一 檜垣の地ハ集り人さのたんさるるハ後の大式
職人歌合ハ人さとさるる人のさるるさるるさ
一 阿蘇ハ地誌なり一 肥後國 球磨郡ハ地誌
地なり一 陸奥ハ地誌なり一 後ハ又陸の字
ハつきとむつ國もさるる文字ハつきとめめ地も
常のさるなり

一 阿蘇ハ地誌なり一 肥後國 球磨郡ハ地誌
地なり一 陸奥ハ地誌なり一 後ハ又陸の字
ハつきとむつ國もさるる文字ハつきとめめ地も
常のさるなり

一 どの秋風軍の潮ハ一人云おせしと四六八ののちり
おきおせのな中残てあつらよむぬらりぬ
残すしとすする人ハみおるよかけしとらこころ何る
しと無りる

一 琵琶の風と潮返風と潮のきと指を今よるは
にふり人なりしと加はるる海の中とせける
とつひとあはぬの文とさうかてかきなる海一
と無ひなる後は片海舟を人よかりて見るに我
れとかりてるよ病も老らす又古ハ樂の潮と
秋の潮と六八とてちりせし回音のあつらとさ
つしとかりぬあも又潮の名琵琶の海とせける
つねとえといよくとおひひとらぬあはじま
れて老上のましとらひとせけるは夏夜の道のたぐ
かりたりとちりぬとさもひらつとらぬおひひとらる

一 是れもいひのよいかも遠ふるをよ悪なるもも
かめいしとまいて聖徳の人の上とくはすぬらるたの
礼樂もたこふたに海屋とさや

一 牙とさハととむするハ歯字をけきとらなる
里利の學校ハ花とる易の點に猪牙とぬのき
やよあつととのせゆあもさりよなり

一 近あつとるこころ琴もはつとら文字のやとらぬ
のすさくえとらるともえとらるる催る出のたつらる
物なり催る楽とをもをハ當のまのつせとらとら
かめハ秋風とら古とらぬのちとらぬとら
しとらとらとらとらとらぬとらぬとらとら
らよとらとらとらとらとらぬとらぬとらとら
一 原は物とらとらハ病と茶用とらとらとらとらとら
めとらとらとらとらとらとらとらとらとらとらとら

一 藩の純よのわさる國なるは十の五に六の郡をいふ
 るゆなりは後國の字を以て張大するんを
 一 これも國の字のきこと得てて州の字のきこ
 せり異國とて一統をさし國と思へり八國の字を
 一 藩の字をさしとてみまよはさし思つるなり
 一 藩の粗さのふゆくいはお大和物徳のまかち海軍
 一 物徳のき竹とあ竹をさし物徳のかか海軍の
 一 親善とさしゆをさし濱成竹成をさし古のゆき
 一 のゆき大形かくしそつささるるなり
 一 鎌倉の時かきさし進士とらふなりや日蓮
 一 のゆきとささるる物なり進士をさしふ人のゆき
 一 進士のゆきなり
 一 度際とさし物も鎌倉の時かきさしなり
 一 ささるると補地ありさ青さくさるるなり

一 といえさあささるるささるるささるるささるる
 一 かくささるるささるるささるる
 一 一の臨臨するものする八卦のささるるささるる
 一 出さるる
 一 唐とささるるささるる朝鮮のささるるささるる
 一 しなり異國とささるる日本國とささるるささるる
 一 るのなま任那加羅とささるるささるるささるる
 一 邦とささるるささるるゆき異國のゆきとささるる
 一 かりささるるささるるささるる
 一 兵とささるるささるるのななり今ささるるささるる
 一 梅とささるるささるるささるるささるる
 一 梅とささるるささるるささるるささるる
 一 梅とささるるささるるささるるささるる

一 傍郭のまゝて書跡も十年入りの物と云りて
 用ゝ斜外中指さるる斜の字と邪とあけり物と
 斜と通ひて又邪と邪と通ひると字の異なる
 ことありすは傍通ひと云らるなり
 一 律と事と通ずるる古くありしものも後には
 通ひやぬものなりと昔邦人は毎く申あたり
 一 白氏文集の「匹姫身後」といふ匹姫すといふなり
 ころなりと古の字は匹姫身と云ひてするす
 ことありて古の字と云はるなり
 一 まえ穴よりいふ古くありし穴なりとまへに
 まへののまりと事係六年のは其字のやうなる
 砂りてこれよりいふ年のことなむなりと云て
 云らるなり
 一 崎とくえんをえ嶽とくちるることあるに似たり

一 ぬるるゆひなりと云はるる大なりと云はるる赤に黒い
 二 粒有赤に黒いことと云はるる黒と云はるる下
 一 上徳園の南の方へ人の物かきくことと云はるる
 一 江と云はるる坂倉と云はるる江と云はるる
 一 文と云はるる水倉と云はるる水と云はるる
 一 様子等のかきと云はるる様子と云はるる
 一 下と云はるる下と云はるる下と云はるる
 一 因坊園のまゝ家の祠と云はるる造らるるなり
 一 傍有餘上のものなりと云はるる威者なりと云はるる
 一 孺と云はるる酒と云はるる酒と云はるる
 一 齋と云はるる法傳と云はるる懐強と云はるる
 一 漢の体の別なりと云はるる日本武と云はるる

つらからからくそつらきなり

一 絶句と三行三字律詩と五の三字よやくといふ
歌の懐帝の志似てそめ山の傍のきりしり

なり

一 吾邦のむくく一字年出く一字空まそなり
明のほくあ字捲頭まそなりなり

一 そのむすし文の釋義の形なり

一 羯鼓のもんらひのこもるも摺の字なり
吾の留

くハ未の字のまかりなり

一 十の指と十段段意とふるん志を宗と印相と
むすふと十段段意と十の指のひらくこまぬ
つけらりなり

一 精進とらんがらん吾邦のえと秋は剛とらふ
わんふ方とらふなり

一 ちくく鐘なりそらハあきなり
粒斜法なり

一 吾常楽の字とすくて唱ふされ共平家ゆ
はま術のよめくもよハゴくわくくこる

とんれハむくハ濁りそり

一 借れり七軍けんま又けんま
そふるなり

一 有見敗とかく見敗見敗家とらふ
呪文なり

悪魔と拂ひさすなり

一 考成のむすめと中将娘とらふ
かき女のな

な名とほくもハ末のりなり

一 ちやくちやくハ赤日なり
あむ日ハ又星日也

一 一 伴系國ハ氏長者ハ藤氏
保氏ハかきぬ

一 三郎ハ笛ハ玄宗皇帝のりなり
いん法てら

一 牧笛のりハたきなり

東條の御一掃なり

一 八唐よりあるもの皆の指志のいづくに治あるものも
日本を夷しける詞なり

一村平の戸は猶四十束と出す米はして二石なり
大政大臣は三子戸六石なり 左右大臣は二子戸四
石なり 大納言は八石なり 左大臣は八石なり
右大臣は八石なり 三子戸四石なり 四石なり
四石なり 一石は三百戸六石なり 二石は二百戸
五石なり 三石は二百戸四石なり 四石は二百戸
七十戸三百四十石なり 五石は二百戸二石六石
なり 流石は二百戸二石なり 此のよき戸にま役
と何れも使ふなり

一 左の甲斐のさくらよきまてかこむまききり式のもの
より 肥後の國の正税は解谷四十万束 國分ち料四万

七千八百七十七束 少殊考料二万五千束 官公解三十五万
束 衛士料三万五千七束 舟乗修治舟度金料一万束
池清料四万束 救急料七万束 修固料十七万三千四
百三十束 金も七万七千九百七束 米なり 米は
る月一々七方一斗四百五石五斗五升なり 是石
の場より四石半斗納る積るれは八百七十石四十四石
舟一石船なり 上徳國は六百千束 米は七石五斗
舟一石なり 舟の積るれは百千石 舟一石五斗五升なり
甲斐國は舟三万石 舟一石五斗五升なり 舟一石五斗五升
石は右の積るれは七万石 舟一石五斗五升なり 舟一石五斗五升
より八丈八寸三倍なり 舟の舟は修田 田功 田功 田
舟のふねの田も何れ一石は八斗五升なり 舟の舟は田也
舟の舟は舟なり 舟は舟なり 舟は舟なり 舟は舟なり 舟は舟なり
舟は舟なり

一本筋とらふ吾神とらふのなりと思ふに流るり
と武徳の序とらふの風俗とらふの
吾朝とらふの事とらふの事とらふの事
早急とらふの事とらふの事とらふの事

一 四姓とらふの事とらふの事とらふの事
とらふの事とらふの事とらふの事
つらふの事とらふの事とらふの事
原九子巨勢方の階春日滋野滋岳笠河田葛
城高井沙松中麻賀茂家原七輔佐依部
布留吉丘三原三岳大原栗田四部島田中

吉野指甘茨田午島収合丹羽祐道阪高
大坂高尾波多黒川長谷部川邊藤原
部法田楊井暇部岸田平郡佐和良中
日下部河原古春口部三枝物本大形大
石井の類ハ姓なりとらふの事とらふの事
て此の内よりとらふの事とらふの事
一 踏とらふの事とらふの事とらふの事
とらふの事とらふの事とらふの事
一 返前とらふの事とらふの事とらふの事
なり軍法者の家ハ通規とらふの事とらふの事
えとらふの事とらふの事とらふの事

りのこまふらるるなれはなり長部か人かといふ
たもあはれも言もかへるなりのもるやいふ
るあまのふらるる神の祝詞也上の作せらる
高きあまをなむるあまなり

一 兄方をねそいひやうかねそえさうなる下
一 望の宮とびやうかうこふとの案ありを
一 舟福又の許あそむかきりあそむ文字とひ
うらやう丸上やうなるやう乞の竹は也の竹
まふ山をなす乞ハ黄縷也ハ紅調なりは二竹を
かきしそ丸上の竹より山口とひさそをれより
修より好の竹より山口とひさそハか子遠らぬ
かきし丸上やう名つてさうなりその案ハ形長なり
うらやまの竹より山口とひさそなるやう乞の竹
と長と短と也の竹と見しかかこつうやう

乞のやうと行の山にせしとて行よのなるを丸
の山にやす丸のなると上の山にせし丸と上の
たふとを十のふにせし也の竹は歌あんなて見
るなり

一 つらのあしやうなるを秋もとちやうハあ初の内
き越の者もやうなるとのそそそのけりのあ初を
ハ秋よりなる平調の三律とて卯辰辰を
かきなりやういふもあまなりつらものあしや
いふハ二律の調とありなり一切のあし初の
秋と結とすんなる心とあし初とちやうなる
あしやういふと歌うとちひはれハなり
一 長歌短歌やういふとあし初ハ長と短といふ
さぬのやうにやういふとあし初なるやうの歌に
ちのくちらぬなる

せらり子のほりし秘蔵の形ひて泥子の藉費に入
りて良衣を穿たりしころのまされはち家々のよ
きもゆきころありは母のやうなるものまをちにはら
かりなるべしそはらほりは紙とてその法師
いりりし遊遊をせよなりて清僧なるりしころ
福山諸君の安帯の僧達七百年一集多六
活僧なりしころなり

- 一 大内家の遺物なりしとて孝孺の指末て節曲の
とるもの富曲集二巻富曲抄三巻真曲抄を巻
宛百抄一巻拾葉集二巻拾葉抄を巻別集追
加一巻五林苑二巻抄目録と撰要目録なり
又保の伝はるる燕永の活りてん比にりるなり
樂ころんようそは娘なり物もえせころなり
一 朝廷のを職なりし武家のを役なりしものも異

- 一 國よる来りし初なる孝職役なりし初なる使一か
きて友人のほりしとて職とて使のつらさを
と使にするなり
- 一 徳元之の雜劇を撰して作するなり元徳の末
きりしなりしとて此ころのりしは國の人の
つらきなりしとてなりしなりしなりしなりし
一 ころくたりしやらりしとて樂の徳をば
他國に在りしなりしハ例なりしなりし
一 ころくたりし掃部ハ階なりしなりし水
階しとてなりしなりし末はなりしなりし
一 掃部をかかりしなりしハ國りしなりしなりし
一 教とてしししなりしハ都墨教なりし教なりし
なりしなりしなりし

- 一 隼人をとるんこぬらえんて略しころなる下
- 一 英菴派のちからめきつたも古のきく志云
天台のちからは流多けりおもて危おより
ゆるえん古法の様よるこも
- 一 異國のちり入道やつる入道きりなりころ
多し吾邦よちから傍にるりころといふ法
師もあなり
- 一 勾峽をまかりとよむ酒匂ところとよむま
つりころふよりころなり
- 一 ねい海と略してねい堂いふ海やうも略えなり
- 一 必く尾をいふ兵の字なり
- 一 推原平之子を源をきり源公子をやる
しや猶後少平も小野はるりと平氏を冒せり
はつりいふはまをたりの名よりかりきやう

- 一 武者不といふ官府の名なる下 古書不は府
子不記録不の類なり 其家者流の筆のふ
十六箇箇は武者不三三ありやういふ箇と
得るなり
- 一 一のをの礼曲やうの曲や宮曲古曲の類なり
謡ふ曲舞のやうの曲ありともといふ宮曲古曲の類
にち後をほりころなり
- 一 代官といふは代といふ官をその名代なる下 戦
国よりなりて又官といひころころよりとも
軽き職なるなり
- 一 石字といふは石の字の石の字と起しり後美
の代りふれりこの後よりころころ初田も
いふ海も稱し能は宗もなるりころと平

記の記あるは巧らぬ國より信なかり仁木洞左木
 ちとしひひり見よりしと水のつらうお姓を
 かア神代よりなり
 一 日の神のて懸たにありうたぬしといふは日食
 のるなり 瀧神の神楽を奏せしといふは日
 食を救ふことなる
 一 一のをの功多しといふ筆の微名を字に甲の字
 微名のやうなるは異國もつらうなり也此
 の神字しと字はわらうを五神の人字に記
 する字つえんを甲字に別につまらんまゝなり
 一 瓜をわりやかくるは壺盧をこらと書くは瓜
 壺盧の唐音うるるなりうたやとの字を瓜と
 せとかくなり
 一 瓜もこもしと瓜やうなれん
 一 瓜としふなり

一 孝標の女のうけらるものゆに武志の國だけあし
 望ふ下るしこの芝なりや
 一 甲斐の國に大まりのの神を祀りて又あまを神と
 名づくは日武志のよこなるなり歌の下の句をばさ
 しくは和歌の末をいふなり
 一 乙非をいふなるはとてあやまりて一傳をてぬ
 神字をまじりしそのまじりに山梨國の明神
 是社のあに神をなすといふやうなるは甲斐
 乙非といふなり甲斐のつらう 甲斐の乙非
 りといふなりといふをまじりて甲斐の國の根をな
 りといふなり
 一 上總國は日蓮宗の一經つらちも信もなくて
 乙氏のひそくは三つなりかくらなるなり
 一 日蓮宗一向宗なるのたつらやうに

一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず

一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず

一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず
一 予のものはけり 流の勢いありて日しやもあらず

りて八宗派のついでに...
なり大幻流の...
一 麻布を...
おと...
れ...
き...
い...
一...
帝...
一...
新...
五...

南留別志卷之五終

和歌世話

祖徠先生評

門人

南總 宇憲 校訂

素...
あ...

君...
の...
白...
都...

人...
乃...
く...
ん...
り...
新...

に 中やとえなん

地のふかり記ふきすつけてんやとれちりハ

君子の心をえたり

班鳩や富猪川のうえにまらる大君の法

はは忘れぬ

民のかきひ強そなれるをかなしひ強そ

治さるあかへしなま

足利の山音の尾張志よりとあそまらうく

然といひしうもぬん

そよのあかへし多からんた宛ん中

なるくあ果しの浦濱に新羅月志ゆ東

く水ゆくみよしそねり

古乃人の別と塔むんとのうらまかりに

こそ有らぬ

青海さらぬゆとこけんれあまかなり三

望この山よ山月かき

あらあき後るうこはあらし

き返乃らあまきあらぬ山中にたねつなく

もよこさるる

古と集乃歌の中あはしぬらとやふと

たの洞さへりあふ

百本の大木人かいしあまきやさくかき

てはあきし

あつきのしせなるう詠り

うねしをゆふしやむる衣袂ゆこふ

とそあきし

懐つらあきとよく後るうはれとらあるをの

乃あつきよもあらはあつたなるる

歌のよのえふなれいななり

よかろくしや河を東流なりてこの河さくさく
流るるの志はくさ

仙人の歌なり

和国は東の千のあたをきと流出ぬさ人な
つそよほしは約め

橘西通より東をきと流

赤膚は都はくさくさくさくさくさくさく

ちふふ人はいふなり

揚乃を花をれもあつすすひさこのはくさく
さくさくさくさく

んあそふたらしや折らん

泪の流るまるとさくさくのちのちよはえよ

すなうね

月夜より夜をきと流る人よつけはくさく

あくちりきまういのんし後のひよよ

あまの河もあまの河もあまの河もあまの河も

あまの河もあまの河もあまの河もあまの河も

あまの河もあまの河もあまの河もあまの河も

あまの河もあまの河もあまの河もあまの河も

あまの河もあまの河もあまの河もあまの河も

あまの河もあまの河もあまの河もあまの河も

中村萬喜 奔直道

世稱博物多聞者所不至也然非微無能濟其
博何也張華之博物居於百歲之下而知於百
歲之上能辨漢宮之制於已墮之後至隆平間
徒知為異乎耳非遇雷煥焉決得于將邦故問
典故而知之博物之人或能為至見乎以知古
聽彼而悟此非識者則不能矣徂徠先生之於
經術以穎邁之才通貫古今之典籍開聖學於
千歲殆絕之後其發微顯隱古來所未聞也又
其所學及意道之所趣而馳騁世之可驚者曰
南溟翁志是特備休身然自非有見乎以古
述彼而悟此之微縱使博物如張華從理斗間
之氣茫焉而已矣何以能懸斷之為將志惟
使識如雷煥果無通貫古今之學何以能得真
所以思能之由邪故張華必遇雷煥而後得乎

將其博與識會而後有此書其難是定生之備隨
不可不博也竊笑世之收後子弟以斗筭月得物
適之才以按學月列博物之編從之爭效聲歎
浩華之博物而無雷將之識則其所為其穢滿目
從偶有博物如張華之識也雷煥不易得則此書
之不可以續也必書

東都年好古撰

新園源冲道書

寶曆十二年壬午正月

東都書林

村田小右衛門

此書不備之史探遠近出寫之

子時

文政元年端生月七日

牛村直德



